

2018 年度第 2 回国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会

議事要旨

1. 日 時：2018 年 12 月 13 日(木) 13：30～15：30
2. 場 所：国立情報学研究所 20 階 実習室 1,2
3. 出席者：

(委員)

逸村委員（筑波大学）、今井委員（東京大学）、深貝委員（横浜国立大学）、倉田委員（慶應義塾大学）、野崎委員（高エネルギー加速器研究機構）、久保田委員（北海道大学）、高橋委員（東京大学） 荘司委員（早稲田大学）、市古委員（慶應義塾大学）、武田委員長、江川委員（国立情報学研究所）

(陪席)

漆谷部長、山地教授、平田室長、新妻係長（国立情報学研究所）

(事務局)

小野課長、吉田副課長、菅原係長（国立情報学研究所）

4. 議事：

(1) 前回議事要旨（案）について

事務局（菅原係長）より、前回議事要旨案について資料 1 に基づき説明し、内容の確認を依頼し、了承された。なお参考資料 3 については内容の性質上、委員限りとした。

(2) 2018 年度 SPARC Japan 活動状況について 【報告】

事務局（菅原係長）より、資料 2 及び参考資料 4、5 に基づき説明後、以下の通り意見交換を行った。

【第 3 回セミナーについて】

- ・ OA2020 で行っていることや、今のドイツの状況など、直接お話を伺えてとてもよかった。Gold Open Access(OA)の状況についても国内研究者に詳細に語っていただき、とても面白いセミナーになったのではないかと考えている。

【第 4 回の企画について】

- ・ 非常に大きなテーマで、誰を対象とするかで内容がずいぶん変わってくる。現在の参加状況から対象を図書館関係者とするのは妥当なので、図書館関係者にうまく伝わるような工夫をしてほしい。

【高エネルギー物理学分野の INSPIRE の研修について】

- ・ 研修期間が最低でも 3 か月間のため、機関としても簡単には派遣できないというのが実情である。機関からは打診もあり、前向きに検討していただいている。今後も研修は続けていきたい。
- ・ 本研修の実施については、CERN の Salvatore Mele 氏の強い要望があったと理解している。2～3 年経過して、その成果を踏まえてどうするかということだ。
- ・ 元々の趣旨と過去 2 年分の成果をレビューして、協定期間 5 年のうち残り 2 年を、これま

で通りとするか、どういう人を派遣するか等を再考することとする。

(3) 国際連携の状況について【報告】

事務局（菅原係長）及び武田委員長より、資料3に基づき説明後、以下の通り意見交換を行った。

【arXiv.org について】

- 10月のMember Advisory Board (MAB) 会議において、Computing and Information Science (CIS) のDeanは、運営体制が変わることによってシステムがより改善され、ファンディングもやりやすくなるのではないかと述べていた。MABメンバーとしては運営体制の移行に納得していた。
- プレプリントをめぐる動向を把握したうえで、機関リポジトリの役割や、プレプリントというメディアの活用の仕方、お金を投じていく価値等をもう少しフォーマルに議論される場がどこになるのか。例えば日本学術会議といった研究者に近いところで議論されるべきであろうし、図書館ももう少し敏感になるべきではないか。本運営委員会での議論や、SPARC Japan セミナーでの取り組みが、宙に浮いてしまっている気がする。
- いま会費を払っているのは図書館だが、実際に恩恵を受けて、使っているのは研究者だ。しかし、ほとんどの研究者は図書館が負担してくれていることを意識していない。いずれ図書館の支援だけではカバーしきれなくなり、論文をたくさん書く大学がそれなりの額を負担するケースも考えられる。その時に備えて、研究者と図書館との交流を行い、図書館が支えていることを認識しないと、研究費の一部を回そうという気にならない。ぜひこの場が、両者を取り持つ場になればよい。
- SPARC Japan の位置づけについて、arXiv.org をいい例として、情報共有、活動の理解、そのうえでどうしたらよいか考える、ということだ。ベースラインすらない、というご指摘なので、このSPARC Japan を活かしながら、進めたい。

【SCOAP³ について】

- 全体として、国内図書館は尽力しているものの、期待額との差額についてはCERNが肩代わりしている状況である。この状況を、物理学コミュニティに、より一層身近な課題として考えてもらいたい。野崎委員から働きかけていただいて、まず高エネルギー物理学分野の論文をたくさん生産している機関の研究者のレベルで共通の合意ができるように調整していただいている。
- 差額が出る理由としては、拠出期待額が論文生産量に比例しているためである。非常に研究活動が活発ということで分野としては喜ばしいことだが、拠出金は図書館から集めていて、購読料の振替がベースになるので、差額が大きくなってしまう。図書館の方には、NIIを通して働きかけていただいて、これ以上は難しきところまで来ている。そういう状況であれば、論文生産側が貢献をして、差額を埋める努力をしないといけない。

【CLOCKSS について】

- 資金的には健全で、出版社も払っていて、運営もきちんとしていて、コストを考えながら、運営している。値上げは物価上昇分なので致し方ない。
- arXiv.org と同じように国内機関に年会費を払っていただいているので、広報資料を見てもらえるように、図書館に掲示するなどお願いすることも重要だ。

(4) JUSTICE における Open Access に係る活動状況報告【報告】

市古委員（平成 30 年度大学図書館コンソーシアム連合運営委員会委員長）より資料 4 に基づき説明後、以下の通り意見交換を行った。

【JUSTICE としての OA2020 への取り組みについて】

- ・ cOAlitionS や OA2020 が目標としているのは即時の OA ということだが、少なくとも、サブスクリプションにお金を払う形から、read and publish、つまり論文出版について考慮した契約を結びたい。まず可能性のあるものから取り組みたい。
- ・ いくつかの出版者とは日本の出版の状況を話し合っていて、read and publish に近い提案を出してくれるところもある。しかしその実現可能性については個々の大学で事情があり、簡単にはお答えできない。できれば小さな形でそういう契約を取り付けるなど、いくつかやり方を考えつつ、ということになる。
- ・ スモールスタートと同時に、JUSTICE には、研究者など周りを巻き込んだ活動をやってもらいたい。現在、ジャーナル購読のビジネスモデルは破たんしており、大局的なところにはアプローチして欲しいという希望がある。
- ・ JUSTICE においてもどこにどう働きかけていくか、日本の中でだれがどう言い出すのか、というところで思案している。研究者の方にはご協力いただかないといけない。

【OA2020, Plan S に対する SPARC Japan としての議論について】

- ・ ヨーロッパでファンドが出すお金はすべて条件付きにするとっていて、購読料をやめて、その分、あるいはトランジションの間もしっかり APC の予算を用意している。日本も資金面を用意しないと安易にやりますとは言えない。大学ベースであれば、大学間での合意が必要だ。政府が動くなら研究予算の何パーセントを APC に使うとか、別途用意するなど、ほかの国を参考に、資金の仕組みを変えないといけない。
- ・ ヨーロッパで批判があったように、研究の自由を奪うのではないかと、という指摘もある。研究コミュニティの理解も深めないと、かえって研究者の反発を生んでしまう。さらには大学の評価システムまで踏み込まないと、全体としての研究の力が落ちてしまう。
- ・ 社会にオープンであり、数量的にアカウンタビリティがあるような仕組みを整備しようとするについて、21 世紀になって様々な行政の仕組みを含めて強めている。それが徹底されることによってインパクトファクターで学術評価をする仕組みから離れることが難しくなっている。学術レベルで何をやらなければいけないかについて、国大協や国大図協、JUSTICE 等を交えて、契約のあり方にとどめずに横断的に議論してはどうか。
- ・ SPARC Japan と JUSTICE が Plan S に対する関心表明のようなステートメントをつくって、そこにいろいろなコミュニティ、出版や研究、あるいは大学評価などに携わる関係者に動いて欲しい、関心を持ってほしいというメッセージを込め、できれば実際に会議を開くなど考えられる。
- ・ 課題として、何が問題か、という説明に時間がかかることが挙げられるので、それを短時間で理解できるパンフレットのようなものを用意してはどうか。
- ・ 理念的にはよさそうに見えても、日本の科学界に致命的なことが起きないかを考える必要がある。雑誌にランクがあり、著者が APC を払うとなると、研究資金が乏しければステータスの高い雑誌に論文を出すことができない。SCOAP³を始めるときに、コミュニティが結束して、入札など、価格を抑えるような仕組みを導入した。これは高エネルギー物理学という限られた分野で実現したが、同様に各分野が取り組むべきではないか。
- ・ 図書館の立場から申し上げると、APC はどこが負担するのか、ということが学内で議論になる。APC と購読料のバランスは分野による違いもあり、これといったモデルがないことが学内で判明した。大きな枠組みができると学内的に合意してくれるだろうが、いまはそ

れが全くないので、図書館の現場でもろ手をあげて賛成ができない状況である。

- ・ メリットと同時にデメリット、潜在的な課題ということを提示しないといけない。Plan S に対する関心表明のようなものをつくる作業をぜひ始めたい。委員会以外の関係者にも協力してもらい、素案をつくる、ということを経済3回までにすすめて、議論したい。

【Web of Science 論文メタデータの取り扱いについて】

- ・ 論文公表実態調査で使用している論文メタデータは、クラリベイト社から購入をして、その取り扱いについてはNIIと先方との間で、取り交しをしている。この取り交わしに基づいて、今後も調査・分析することとなることについて、事務局より補足説明があった。

(5) 国際学術情報流通基盤整備事業の見直しについて【審議】

事務局（菅原係長）より資料5に基づき説明後、以下の通り意見交換を行った。

【SPARC Japan の名称について】

- ・ SPARC Japan という名称については、SPARC (US) との次の提携も進めており、セミナー等でも多くの方に認知されており、引き続き使っていきたい。

【学術情報流通推進委員会（仮称）第1期（2019～2021年度）（仮）の基本方針及び活動計画について】

- ・ サイエンスのコミュニティとして、なぜOAやオープンサイエンス(OS)を推進するかという説明があると、より研究者にも、自分のことだ、と納得してもらえるのではないかな。
- ・ いままではこの活動が比較的図書館に近かったが、研究者コミュニティも入ってこないといけないということであれば、科学を推進するためのOSは重要だ、という点を入れたい。
- ・ 国内ステークホルダーについて、まずはJUSTICEやJPCOARということはわかるが、理念としてはそれに限らず、すべての学術関係団体の調整に努めるといった意味合いを込めてはどうか。
- ・ 「等」で広く学術コミュニティを、ということにする。資料5-2の(4)についても、この活動ではないのではないかな、という意見もあったが、我々は調査の企画提言までが仕事で、実態は別のところでやることがある、という仕訳をした。
- ・ オープンにすることによって、いろいろな情報に対して多面的にアクセスする、知識のあり様が変わる。何年かきざみでやったうえで、研究者のふるまい方を観察する、などといったことを射程にいれておいたほうがいい。
- ・ 前段階のところ、例えば「OSによって学術の在り方が大きく変革している」、そういうことを入れて、「それに対応するため」、など、基本方針の後ろの段あたりに、状況を理解していると入れてはどうかということになる。今期の活動に基づいて書き直したので、今の活動との違和感がなくなった。基本方針の後段のところ、目的なりを工夫して、広範囲に関係あることを知らせる、ステークホルダーも図書館でないところも入っているということに文面を直す、この2点について修正して第3回で再提案する。

(6) その他

特になし。